

Culture Meeting
**文活
台湾**

台湾文化路徑

カルチャー

ルート

日本の皆さまが
台湾カルチャーの美を深く知る道しるべとなるよう
今年のカルチャーミーティングでは
「鉄道」「お茶」といったトピックをもって、
台湾文化センターならびに誠品生活日本橋で、
テーマ毎のブック展・展覧会などを開催します。

台湾文化路徑 鉄道篇

カルチャールート
文化路徑とは、文化的アプローチを軸に、有形無形の多様な
文化的遺産をつなげた“文化の道”です。
暖かなヒューマニティに溢れ、豊かな歴史を有する台湾。
台湾文化部（文部科学省相当）では今、台湾ならではの文化の特色を結びあわせ、
積極的に「テーマ性・ストーリー性」をもった、魅力的な国際観光周遊ルート、
カルチャールート
すなわち文化路徑をつくり出そうと試みています。
これによって、台湾文化のアイデンティティと拠り所を求め、
異なるエスニシティ間の相互理解と交流を促します。
また貴重な文化財を保存し、文化観光の発展に寄与していきます。

心に残る 台湾の鉄道切符展

6月10日(水)～ 8月31日(月)

会場 台湾文化センター

台湾の「硬票」は日本の「硬券」に由来し、その印刷機械と在来工法もすべて日本から伝わったとされている。硬券の姿が消え去りつつあるなか、台鉄はその製造技術と設備を今でも継承しており、「永康－保安（永遠に安らぎと健康が続きますように）」「追分－成功（人生の岐路で良い方向へ行けますように）」といった昔ながらの乗車券（縁起きっぷ）をつくっている。本展では、活字母型、現役で使われているきっぷや希少な硬票、鉄道にまつわる文物を、解説を交えて紹介していく。

「硬券」切符の製造過程が記録された「印票傳藝」（切符印刷の伝統芸）のドキュメンタリー映像も日本語字幕付きで日本初公開の予定。

台湾文化路徑 お茶篇

カルチャー

ルート

山に遊びて、
遠くを眺めて
～台湾高山烏龍茶～

日程未定

会場 台湾文化センター、誠品生活日本橋

ゲスト：王徳傳茶莊五代目・王俊欽氏
司会：赤松美和子（大妻女子大学比較文化学部准教授）

5歳の頃よりお茶に触れ、お茶の世界に踏み入れて40年の月日を超える。台湾茶に対する熱い想いを胸に、これまで王徳傳製品の研究開発を一手に担ってきた。自然を尊重し、大地の恵みやお茶農家をコア・バリューに、百年もの間受け継がれてきた独自の製茶技術と、伝統的な台湾工芸茶の真髄を今に伝える。

関連イベント 台湾茶関連の店頭ブックフェア

台北駐日経済文化代表処台湾文化センター

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-12 虎ノ門ビル2F tel:03-6206-6180 fax:03-6206-6190
地下鉄 東京メトロ「虎ノ門駅」9番出口 徒歩3分 / 東京メトロ「霞ヶ関駅」C2出口 徒歩3分
JR利用 都営三田線「内幸町駅」A4出口 徒歩7分 / JR「新橋駅」日比谷口 徒歩 約12分



beyond2020プログラムは、多様性や国際性に配慮した文化活動・事業を政府が認証し、日本文化の魅力を国内外に発信する取組です。台湾文化センターはこの取組を応援しています。





台湾鉄道写真展

6月10日(水)～ 8月31日(月)

会場 | 台湾文化センター

6月10日(水)～ 7月31日(金)

会場 | 誠品生活日本橋

台湾の鉄道写真家を招聘し、それぞれの眼差しで捉えた数々の鉄道フォト作品を通して、台湾鉄道の美と魅力を伝える。

出展するカメラマンが来日して講座を行う予定でしたが、来日できないため、カメラマンによるメッセージと台湾鉄道風景動画がたっぷり詰まった「迷・鉄道」の映像を公開予定。

出展写真家(計10名)



黃威勝 コウ・イショウ

映像クリエイター。1974年、台湾の新竹市に生まれる。幼少期より、汽車を観ることが好きだったと言う。大学卒業後、映像制作の仕事に就く。2018年「故郷の味」が外交部(外務省相当)潮台湾創作フィルムの一等賞に輝く。「三道嶺ブルース:消えゆく蒸気機関車と生きて」で第42回台湾金穂奨に入選し、門真国際映画祭2019のドキュメンタリー部門最優秀撮影賞を受賞。



古庭維 コ・テイイ

1983年、台湾の南投竹山に生まれる。自然が生み出す景観に心惹かれ、山に分け入り調査を行い、遺跡を訪ね回る。列車に乗り、列車を観て、列車を撮る。現在、台湾唯一の鉄道専門誌『鉄道情報』の総編集長、高雄の旧打狗駅故事館館長を務める。鉄道文化を広めることを志として事業に取り組んでいる。鉄道、登山、古道といったテーマにまつわる著作多数。



張志文 チョウ・チブン

台湾実践大学の室内空間デザイン科卒。現在、教員として母校に勤める。1968年、台湾の高雄旗山に生まれた後、台北の士林剣潭一帯に居を移す。そのため、幼い頃より淡水線に慣れ親しんできた。家業の薫陶を受け、幼少期より美術とデザインに触れ、絵画に興味を示す。列車を「描く」から「撮る」へ移行するようになり、カメラを持って鉄道写真を撮るようになる。豊かな自然景観を求め、旅行へ出かけるうちに、鉄道風景写真の虜となる。



陳映彤 チン・エイトウ

1986年、台湾の宜蘭縣羅東鎮に生まれる。幼少期における最も鮮明な思い出に、松山駅の有人改札前で汽車が往来するのを就学前から観て育ったことを挙げる。小学5年よりカメラを持ち、鉄道写真のキャリアをスタートさせる。現在、鉄道専門誌『鉄道情報』でプロカメラマン監修を担当。写真を介して、鉄道の魅力を多くの人々に届けている。



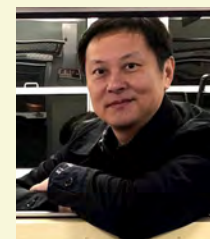
林柏廷 リン・ハクテイ

1987年生まれ。台湾・新北市出身。祖父の家へ行くのに駅で下車をしていたことから、幼少期よりトロッコ台車が旅客を運ぶのを眺めるのが好きだったと言う。高校に入り、母親から譲り受けたペンタックスのフィルム一眼レフ機で、鉄道とそれに関連するテーマを撮るようになる。アナログからデジタルに移り変わった今でも、鉄道撮影に情を出している。



傅子訓 フ・チクン

1985年生まれ。台湾・屏東県民。父親が汽車の運転士であったことから、幼少期より鉄道に対する特別な想いを馳せていた。中学の時より、鉄道写真に触れる。現在も、颯爽と走る列車の勇姿を追いかけている。人々と鉄道の交流物語を記録するのも得意としている。



鄭銘彰 テイ・メイショウ

1966年生まれ。子どもの頃、台北とふる里台南を家族と往復する帰省の旅が、最も心躍らせた思い出であると語る。台鉄の特急長距離列車から、糖鉄の気動車に乗り換える面白味を体験してから、鉄道に魅了される。2019年の終わり、24年半勤めた台湾大学図書館から文化部(日本の文部科学省に相当)へ移動となる。現在、国家鉄道博物館籌備処で秘書を務めている。



李春政 リ・シュンセイ

1976年台北市生まれ。台湾交通部に務める。幼少期に、家族とよく祖母を尋ねに行きの列車に乗っていたことで、鉄道にのめり込むようになる。大学に進学した際、台鉄および林鉄が次々と蒸気機関車の修復を開始するといった、これら重要な出来ごとを目の当たりにした。近年は、蒸気機関車に対する情熱が高まり、最後の「蒸気時代」を見届け、カメラを片手に消えゆくSLの姿を追っている。



林政廷 リン・セイテイ

1971年生まれ。民間企業に務める、台湾・嘉義市民。幼少期に乗った汽車や見た列車が、鉄道に思いを馳せるきっかけとなっている。中学に上がり、日本から輸入された鉄道関連の書籍と訪日旅行に触発され、カメラを片手に鉄道写真を撮るようになった。台湾国内に留まらず、「撮り鉄の旅」に出かけては、沿線の風土と暮らしを堪能しつつ、現地ならではの鉄道風景を記録している。



陳威臣 チン・イシン

1972年、台湾の南投に生まれる。現在、東京都在住。幼少期より鉄道に興味を持ち、1982年よりドキュメンタリーフォトと鉄道写真を撮り始める。並行して、鉄道や沿線の暮らしにおける歴史的発展をも研究。現在は、台湾メディアの駐日特派員のほか、フリーランスライター、日本の政治経済問題を専門とする批評などを行っている。主な発表先にUP MEDIA、udn Global、中華文化総会が発行する『新活水』、Thinking Taiwan、Voicettankなど。

